

■県青年リーダー養成海外研修記 大自然の中で

遠藤真由美

オーストラリア カンガルー島へ

平成元年九月九日から十二日間、私は県青年リーダー養成海外研修の団員としてオーストラリアへ行ききました。私たちの研修のメイン舞台となったのは、南オーストラリア州のカンガルー島でした。ここはアデレードから飛行機で約三十分。オーストラリアで三番目に大きな島です。私たちはこの島にあるビボン湾野外研修センターで、四泊五日の研修に入りました。野外教育基本プログラムを通じ、自然と人間、動物と人間の在り方から、リーダーシップとメンバーシップを体得するためです。九月十一日早朝、アデレードからカンガルー島へ。空港には研修センター所長のグラハム・リース先生が迎えにきてくださっていました。かなり大柄でとても優しくなな方でした。グラハム先生は研修所長であると同時にこの島のレインジャー（自



えんどう・まゆみ (中大郷・22歳)
ワープロを一生懸命練習中という、はつらつギャル。自称「パーティー娘」

然保護官)でもあるのだそうです。私たちはグラハム先生の指示、案内のもと、日本ではできないさまざまな経験をしました。

コアラ、アザラシ、 そして南十字星

第一日目、ユーカリの葉をかみまじした。まるでコアラになった気分です。おそろおそろかんでみると、口の中がスースーハアハアして、甘くないハッカあめみたいでした。「この葉はユーカリオイルの原料だから害はない」との説明を聞き、一日中この葉をかみ続け、コアラ気分を味わっていた団員もいたくらいです。そして第二日目に行ったシール・ベイのアザラシ湾。ここは事前研修のころからかなり興味のある場所でした。アザラシなど見たこともなく、野生のアザラシが約五百頭も海辺やその周辺に生息しているというのですから。しかし、当日は前日の大風の影響でほんの数頭しかおら



ず、少々残念でした。それでもアザラシに近寄っては「生きている。動いた」と、かなり興奮。野生なのにぜんぜん人間を恐れず、かえって私たちのほうがオロオロしたりして。帰りのバスの中で「アザラシたち野生動物の生活圏内に足を踏み入れたんだな」と思うと、よりいっそう感動が深いものになりました。研修三日目の夜は日本では絶対に体験できない南十字星の観測。先生からその位置を教えてもらい、観測できました。先生の話では本物と偽物があるので注意が必要とのこと。また、この島は空気がきれいすぎるため、星たちがキラキラとまたたくことがなく、いつも一定の光で輝いているのだとの話もあり、再び夜空を見上げてしまいました。



グラハム・リース先生とともに

生活を過ごし、やはり人間にとって自然とは偉大であり、また必要不可欠なものなのだと思えました。このことは地球レベルで考えても同様のことが言えると思います。今までの頭の中でしか理解できていなかったことが、この研修で身をもって感じる事ができ、ほんとうに良かったと思います。そして、もう一つ良かったと思っていることは、グラハム先生と出会えたことです。先生の人柄に、リーダーとしてのほんとうの在り方を見ることができたからです。自分の知識におごることない、的確な現狀判断と行動。そして、私たちと同じ視線で話をしてくださいました。先生に会えてリーダーの在り方がなんとなく分かってきた気がしました。今回の研修は、私にとって一生に一度の貴重な体験でした。これから好奇心のアンテナを広げ、何事もチャレンジ精神で青年団活動などを行っていききたいと思っています。



カンガルーと遊ぶ

正月

正月とはもともと、一月の一月間全部を示す言葉ですが、最近では三が日を示すように使われる場合が多いようです。

太陽暦が使われるようになってからは、明治五年十二月三日から明治六年一月元旦に改めたときからです。太陽暦のいわゆる新正月は、明治六年からすぐに公職関係の間で行われました。

しかし、一般庶民の間では陰暦のいわゆる二月正月が行われたいわゆるですが、はつきりした記録は見つかりません。おそらく新正月、旧正月とも、正月三が日の行事はささやかなものであったのでしょう。

「一月一日」 田舎の所見

新正月とって六年目の明治十二年一月九日の「新郷新聞」に、田沢実人氏がズバリ「一月一日田舎の所見」と題して寄稿し、白根の元旦の様子を語っています。「白根市史」(巻四)

明治十二年一月一日、私は田舎に住み、例年のとおり早朝に天地四方を拝み、次いで祖先の御霊に新年を告げ、その後雑煮もちを祝った。氏神の森にもうでようとう町に出ると、行き帰りの旅人が気ぜわしく、絶えず間なく、平日と変わらない。こ

うりを背負う人、てんびん棒をかたねる人、みのかさをかぶる人、他郷らしき人、近村らしき人、皆一人残らず生きるために奔走し、仕事に励んでいる(口訳)——と描写しています。さらに、幕政時代には考えられなかった様子だと嘆き、公職にある者以外は皆そのようなありさまだと記しています。



いづれにしても明治初期の庶民は正月も働き続け、新年の祝いはつつましくささやかなものであったようです。

田沢氏はこのような様子を、幕政時代であれば法令で強制したものだが、それができないのは明治政府の寛容さに基づくものとし、時代の流れを述べてもいます。ともかく現在の私たちが祝う正月の行事は、明治初期にあつてはかなり恵まれた階層の

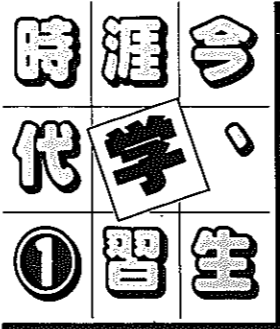
江戸時代の正月

幕政時代、町家の正月行事の様子は「横山家文書」(「白根市史」巻二)や「千野氏日記」で知ることが出来ます。それによると、たいせつな決まった所にしめ縄、飾りもち、飾り松を飾り、三が日を雑煮で祝います。元日は年始、二日は書き初め、蔵開き、三日は仏参り、三が日、七日、十一日、十五日、十六日、二十日は若水くみなどと記されています。幕政時代は、このような行事が庶民の間にも広く行われていたのでしょうか。それで田沢氏は嘆いたのに違ひありません。ただ彼も言っているように、上から行事の強制があつたのは間違いないでしょう。

平和な新年を

田沢氏が願った、自由でゆかしく、静かな正月の風景は、百年余り後によくやく実現したといえるでしょう。いづれにしても、市民が心から祝える平和な新年が、末長く続いていってほしいものだと思わずにはおれません。

「白根市史」全七巻 好評発売中。詳しくは教育委員会社会教育課市史編さん係(☎373・3171)へ。



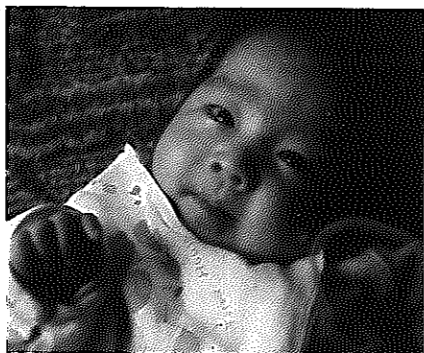
教育委員会社会教育課
佐藤 正 則

今、なぜ生涯学習?

最近さかんに言われている「生涯学習」とは、どんなことでしょうか。それは、自らの意思で、自分自身を豊かにするための学習を生涯にわたって続けること、なのです。言い換えれば、情報化、国際化、高齢化の波に押し流されず自立的に生きるためにたいせつなことが生涯学習なのです。しかし、学習がたいせつなこととは分かるが、勉強はもうたくさんだ、と思う人も多いでしょう。そこで、今、なぜ生涯学習が必要なのかを、もう少し深く考えてみたいと思います。

アペロンの野生児

一七九九年に、フランスのアペロンの森で、人間以外の動物に育てられた十一歳くらいの少年が発見されました。イタールという医



師はこの少年が人間らしい生活ができるよう、五年間、教育と訓練を行いました。しかし、発声、食習慣、衣生活、寝起きの習慣などはほとんど人間らしくならなかつたと記録されています。

この例から、人間が人間として成長するための学習には、次の要因が不可欠であることが分かります。

〈人間社会で学ぶ〉 どんなに高度に機械化された社会であっても人間関係の中で学ぶことが基本(学ぶ時期がある) 言語や生活習慣など、学ぶ時期を逃すと、取り返しのつかない内容がある(学ぶことを知っている) どんなにすばらしい教育内容であっても、学び方を知らない者にとつてはなんの意味も持たない。この三つのは歴史的に見ても、人間生活の学習の基本だといえます。今回はこの点から考えてみましょう。